

草庵仏教

第138号
(発行日)
2001年12月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638126 西宮市
小松北町1-2-3
電話・FAX(0798)
41-5346
(発行人) 土井紀明
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
22日午後2時
.....
- * 聖典講座 (念仏堂)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会 (念佛寺)
第3土曜日午後3時

自己の居場所

L「Dさん、^{あけがらす}暁鳥先生ってお念仏称えることをきらわれた方だったんですか」

D「そんなことありませんよ。(念仏総長)とよばれたくらいです」

L「でも(念仏称えとるもん)にロクなもんおらん」っていわれたそうじゃないですか」

D「しかし、そのあと先生は(そんな者でない)と念仏は称えられん」と言われております」

L「そうでしたか」

D「実は私が^{あけがらす}暁鳥先生のこの(念仏称えとるもん)にロクなもんおらん」という言葉を初めて聞いたとき、少し反発する気持ちが起こりました。そこまでのものはあんまりではないか、と」

L「なんだか念仏申す人をボロカスに言ってるように聞こえますからね」

D「ええ。最初すこしいやな気持ちがありました」

L「どうしてイヤな感じがしたのでしょうか」

D「それは私が高上がりしてたからだと思います」

L「高上がりしているため、イヤな感じがしたんだと言われるのですね」

D「ええ。ですからこの言葉を聞いてイヤな感じがしたのはなぜだろうと反省したとき、(自分

はちゃんとした人間だ」という高みに自分をおいているのだと思いました」

L「今はどうですか」

D「今も高ぶりは強いのですが、しかし(ロクなもんでない)自分が私の本来の姿であるし、そこそ私の本来の居り場だと知らされていきます」

L「(ロクなもんでない)者それが自分だと認めているのですね」

D「ええ、イヤな思いをしてではなく、少し大げさな言い方になるかも知れませんが、喜んで(自分はロクなもんでない)者と承認しているのです」

L「ロクなもんでない自分を素直に受け入れていると言われるのですね」

D「ええそうです」

L「なぜ素直に受け入れられるのでしょうか」

D「それは、私が(ロクなもんでない)ゆえ、(そんなお前だから、ついておるよ、見放さないよ)と私に寄り添いたもう大悲の阿弥陀仏がまします、と知らされているのだと思います。松並さんの歌に

よくよく仏は業な御方
むなく昏れゆく私を
それほど可愛か南無阿弥陀

仏

というのがあります」

L「とても有難い歌ですね」

D「ええ、有難くてとても胸にこたえます。ロクなもんでないから阿弥陀様が寄り添ってくださる、その姿がお念仏ですね」

L「暁鳥先生が(そんな者でない)と念仏は称えられん」と仰せられるのはこういう意味といただいていいのではないのでしょうか」

D「私もそう思います。それから(念仏称えとるもん)にロクなもんおらん」の言葉は私をさらに自由にくれたように思います」

*

L「自分をさらに自由にさせられた点についても少し聞かせてください」

D「私は以前から、他教の人たちのヒューマンな活動をうらやましく思い、私を含めて真宗の人たちはふがいないと嘆くような気持ちをもっていました」

L「たとえばどういう活動ですか」

D「他の宗教者や信徒さんたちが、障害者への福祉活動とか環境問題へ積極的な取り組みとか反戦平和の街頭活動などを行っ

てますね」

L「そうですね。キリスト者などは盛んに行いますね」

D「ええ、そういう人たちの尊い活動を見て、自分はどうして出来ないのかとか、私たち真宗人はダメだなあとか、真宗は社会に貢献度が少ないとか、もやもやした負い目を感じていました。それが(念仏称えとるもん)にロクなもんおらん」の言葉によつてハッと気がつきました」

L「何に気がついたのですか」

D「自分がやつぱり(高み)に居たこと、それゆえにこうした負い目を感じたのだと気がつきました。心のどこかに(人の手本になるような生き方ができ、またできてこそ念仏者だ)というような高ぶりがあったのです」

L「念仏をいただいた者は人並み以上の利他的な活動ができるはずだとか、出来てこそまことの念仏者だという、そういうような思いですか」

D「そういつていいと思います。それゆえに他の宗教の人たちが世の中の不幸な人々のために献身的に働く姿を見ると、自分のふがいなさとか真宗のふがいなさが気になってしまふのです」

【念佛寺報恩講】

ご講師 正受寺住職(同朋会館教導)

十二月二十二日(土)

午後二時より

松山正澄師

L「では今はどうですか」

D「私は人の模範や手本には到底なれない、それどころかロクなもんでない、そういう者だから阿弥陀様が大悲をかけたまい、浄土への往生だけでなく、何とかこの世における場を与えてやりたいとお念仏を与えてくださった、この様にいただいています」

L「そのように伺いますと、親鸞聖人が

「いし、かわら、つぶてのどとくなるわれらなり」

と言われた言葉を思い出します」
D「石ころも瓦のかけらも世の中の役に立たないものたえです。いわば世の中の底辺に生きる者の姿ですね。そういう者に「我が名を称えよ」と大悲を注いでくださるのです」

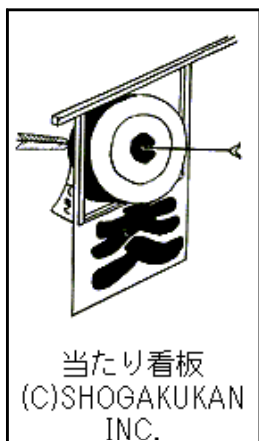
*

L「金子先生が真宗は指導者の宗教ではない、指導される側の宗教だといわれるのはここらあたりのことなのでしょうか」

D「ええそう思います。世の中には教えを弘めて人を善く導き、世の中を少しでもよくしていくこととする、そういう宗教がありますね」

L「クリスチャンは自らを「地の塩たらん」と願って生きるということを聞きますが」

D「ええ、塩というのは防腐剤の働きをします。地とはこの世のことです。この世の腐敗墮落のなかにあって、クリスチャン



当たり看板
(C)SHOGAKUKAN
INC.

は地の塩のように、世の中の腐敗墮落を防いでいき、世の中を善導していきよう、そのために献身的に生きようという姿。それが「地の塩」になるということだと思います。尊い生き方だと思います」

L「真宗はどうもそういうのは趣きが違うのですね」

D「ええ、人はどうあれ、世の中をダメにしている一人はこの自分であり、しかもそういう自分をどうすることも出来ない、ロクでもない者、そうとしか生きようがない者、それが私であって、他者や世の中を善導することは出来そうもない。むしろ善導していただく側である者が私。そんなどうしてみようもない私が、何とかこの世に処を得しめてくださるお慈悲がお念仏なのでした」

L「そこをもう少し聞かせてください」

D「それこそロクなもんでない私に「汝のそのままに生きてよいのだ、そのままを引受け受けて助ける。私は汝を見放さな」と私の全分を受容したもうみ言葉が「我が名を称えよ」という阿弥陀仏の大悲です。正信偈にある「極重悪人よ、唯だ仏

を称えよ」は私のただ一つの居り場なのです。

木村無相さんの歌に

道がある

道がある

たった一つの道がある

ただ念仏の道がある

極重悪人唯称仏

とありますが、ここが私の生きられる「処」なのです」

L「そういう場がお念仏によって与えられるのですね」

D「ええそうです。ロクなもんでない私を素直に承認し、そんな者ゆえの南無阿弥陀仏であることを感じています」

L「正信偈では「極重悪人唯称仏」のあとに「大悲無倦常照我」とありますね。大悲が常に我が身を照らしてください」と

D「それですね。石ころのような値打ちなき存在に目をかけてくださるのです。そこに何かしたら、世の中のお役に立たせていただきたいという思いが起こってくるのがまた有難いことです」

L「それはどういう意味ですか」

D「如来の大悲のお心が身にしみてきますと、大悲からのもおしから、出来ることなら世の中のお役に立ちたいという思いが湧いてきます。実際はわずかなことしかできませんが」

L「いわゆる報恩行ですね」

D「教義的にはそうかもしれま

せん。他教や他宗の尊い人たちのようなことはとても出来ませんが、まねごとでもと思いますし、また他教の人たちのそうした活動のお手伝いでもいいからさせてもらいたいという思いも湧いてきます」

L「真宗のお念仏がどういう人が目当ての法であるか、少し分かっただけに思います」

D「私も今度の「念仏称えとるもんにロクなもんおらん」という言葉に触れて、私の中の「高ぶり」を知らせていただき、また真宗念佛の有り難さをいっそう知ることが出来ました。暁鳥先生に感謝いたしております」

(丁)

(この対話編は、林暁宇師主幹の月刊紙「鳥越だより」に掲載された師の文章をきっかけとして書いたものです)

感心したことです。

歎異鈔第十一章第六講

誓願の不思議によりて、たもちやすく、となえやすき名号を案じいだしたまいて、この名字をとなえんものを、むかえとらんと、御約束あることなれば、まず弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて、生死をいずべしと信じて、念仏のもうさるるも、如来の御はからいなりとおもえば、すこしもみずからのはからいまじわらざるがゆえに、本願に相応して、実報土に往生するなり。これは誓願の不思議を、むねと信じたてまつれば、名号の不思議も具足して、誓願・名号の不思議ひとつにして、さらばことなることなきなり。

(歎異鈔第十一章)

「この名字をとなえんものを、むかえとらんと、御約束」が弥陀の不思議な誓願。この誓いに信順するとは、「きつと必ず汝を浄土に生まれさせる」という仏のみ言葉をその通りにいただくことであり、そのことは「如来の不思議なお誓いによって、如来のおん計らいで生死を離れ、浄土に往生させてくださること」と喜ばせていただくことに他なりません。「我が名を称えよ」という誓願に信順することは、同時にそのままナムアマミダブツ、ナムアマミダブツとお念仏せしめられることでもあります。それは、心には「こんな私をお助け下さることよ」と信じていることであり、身にはナムアマミダブツと申されることでもあります。

これは自然にそうなるのであつて、誓

願を信じてと念仏申すことは離れないのです。「誓願の不思議を、むねと信じたてまつれば、名号の不思議も具足する」のであります。

聖人のお手紙に

「誓願をはなれたる名号も候わず候う、名号をはなれたる誓願も候わず候う。かく申し候うも、はからいに候じ、また名号を不思議と一念信じとなえつるうえは、なんじようわがはからいをいたすべき」とある通りです。誓願を信じてと称えることは、(信じとなえつる)一念の内容として一つにおさまっています。

こういうことは実際に単純に念仏往生の誓願を信じるなら、何ら説明することもないほど経験的に明白なことなのです。

教義や教学が難しくなるのは、自らの賢さを頼みにして弥陀の本願を受け入れない人に、何とか道理的に説明しようとするためにやむを得ず表現が難しくなってしまうのであつて、己のさかしさを捨てて、単純に「必ずタスケルで、念仏申せ」と仰せ下さるご親切に驚いて、(我が名を称えよ)とはこんな私のためでしたかと素直にいただくとき、何の理屈もいらず、本願とお念仏とは一つに味わえるのです。誓願の不思議をいただく段には教義も教学も全く必要ないのです。

「念仏のもうさるるも、如来の御はからいなり」について、聖人も唯円房もともに尊ばれた聖覚の『唯信鈔』には

「ただ阿弥陀の三字の名号をとなえんを、往生極楽の別因とせんと、五劫のあいだ

ふかくこのことを思惟しおわりて、まず第十七に諸仏にわが名字を称揚せられんという願をおこしたまえり。この願、ふかくこれをこころうべし。名号をもつて、あまねく衆生をみちびかんとおぼしめすゆえに」

とあります。阿弥陀仏は一切衆生をどのようにに救済に導き入れるかを御思案になつて、南無阿弥陀仏の「名号をもつて、あまねく衆生をみちびかんとおぼしめす」のであります。弥陀が五劫思惟の時、一切衆生を名号でもつて導き救おうとご思案されたのであります。それで、南無阿弥陀仏の名号に「この名字をとなえんものを、むかえとらんと誓われたのでした。この誓願の名号を衆生に与えて救おうとされるのです。「どうかお願いだから南無阿弥陀仏と称えてくれよ。聞いてくれよ。助けるぞ」と与えてくださるのであります。

阿弥陀仏は我らに南無阿弥陀仏の御名を与えて称えさせ、信じさせて、浄土に生まれさせようとはからわれているのであります。ですから私たちが念仏申されるのは、阿弥陀仏の願力のおんもよおしでありましょう。一声でも念仏申されるのは阿弥陀仏の御念力からあらわれるのであります。松並さんの歌に

「無限極りない六字

あたえて言わせて信じさせ

あなたばかりで南無阿弥陀仏

とありますが、まことに「念仏のもうさるるも、如来の御はからい」であります。

さて、先ほどの『唯信鈔』にある第十七願とは大無量寿経に

「たとい我仏を得たらんに、十方世界の

無量の諸仏、ことごとく咨嗟して我が名を称せずは、正覚を取らじ」

とある阿弥陀仏の誓いでもあります。阿弥陀仏は、無量の仏たちに我が名である南無阿弥陀仏の名号をほめられ称えられたいと願われたのであります。それはこれによつて、一切衆生に名号を与え、与えて導き救わんがためであります。聖人の「弥陀経和讃」に

「五濁悪時悪世界

濁悪邪見の衆生には

弥陀の名号あたえてぞ

恒沙の諸仏すすめたる」

とあり、濁悪邪見の衆生が救われるために、諸仏は名号をほめたたえて衆生に名号をおすすめくださるのであります。

私どもが清らかで正しい見解の持ち主なら、お念仏をすすめられる必要はなかつたのです。思想の了解や坐禅などで間に合うならお念仏はいらないのです。しかし、愚鈍にして邪見傲慢の私どもは名号の方便なくしては救いの光を見いだすすべもない者でした。聖人は

「釈迦如来、よろずの善のなかより名号をえらびとりて、五濁悪時・悪世界・悪衆生・邪見無信のものに、あたえたまえるなり」(唯信鈔文意)

と仰せられ、邪見・無信の者なればこそ、このような者をも見捨てずに導かずにはおけない大悲の方便によつて、名号を与えてくださる、とのお示しであります。

(了)

信仰夜話

「弥陀は凡夫のウブを受けとる。善知識はウブにして渡すのが役。私はただ凡夫の性のウブのまま死んで行くのじゃ」
(吉藏同行の言葉)

この言葉は有名な信心の書である「信者めぐり」の中に出てくる、三河の吉藏同行の言葉である。吉藏同行のいくつかの言葉の中で、この言葉を故木村無相さんは大変喜ばれた。

無相さんのメモに

「ウブは自性のありのままの姿。善知識は有難い処に私たちをおいておくのではない。ホンマの有難いは何もないおたがいですということ、ハッキリ私たちに知らせてくださるなら善知識の役目はすまぬ。われらが心の底に入ると殊勝気な有難いものは何もない。へ無仏法の自分」であるとはつきりと私たちに機を知られるのが、善知識の役割であると書かれている。

仏法を熱心に聞いていくと、有難い気持ちが起こったり、へおはずかしい我が身です」というような殊勝な気持ちになる。あるいは仏法にであったことを喜ぶ心も起こる。こういう心が起こると、いつの間にかへ仏法を尊く、有難く思うような私が私自身」と思い、仏法聞いたおかげで、仏法者になったかのように思ってしまう。仏法を聞く前の私に有難い色が付いて、色の付いた私がホンマの私のように思う。有難い気持ちや慚愧の気持ちが起こると、「これでこそ仏法聞いた

しるし」とそのことを仏法聞いた所詮に思ったり、「私は確かに仏法にであった」「これは信心だけだしたるし」と思つて腰を下ろし、へこれでこそ」とそこに「宿をとろう」(和兵衛同行の言葉)とする。

またそういうところまで同行を導くのが善知識の役目と思うが、善知識の役目はそうではない。

仏法聞いてへ有難い」だのへおはずかしい」だのへうれしい」だのという殊勝の心は凡夫心の自性に貼り付けた美しい色紙に過ぎぬ。凡夫の心の底をついてみれば、仏法聞く前のウブ(生まれつきの)の無仏法の心、仏法をちつとも聞かない心、仏法を信じない自性がドンと座っている。「われらが心の底に入ると殊勝気な有難いものは何もない」。これが自性ありのまま、ウブな私の本質。

へこのウブがホンマの私でした」と知らせるのが実は善知識のまことの役割である。

「仏法聞かしていただいたおかげで仏恩を喜ぶ身になりました」と言う私に、「それはお前の本質ではない。その喜ぶ心の底にあるのは仏法聞いても何ともない固有の迷心、それがお前の本性である」とへ出離の縁のチリばかりもない」ありのままのウブな私を知らせてくださる、それが真の善知識の役割である。

さて、無相さんのメモは

「ウブなそのままを受けとるのが如来の役割。弥陀は凡夫のウブを受け取る、善知識はウブにして渡す」

とある。凡夫のウブを受け取りたもうのが弥陀であり、弥陀の役割である。どう

かなった者を救うのが弥陀の役ではない。生まれつきのままの凡夫をそのまま引き受け給うのが弥陀である。弥陀のお助けは助かる者を助けるのではない。へ助からぬ者を助ける」が弥陀である。

このことは、聞法する程の人なら知っていることであるが、にもかかわらず「どうにかなりたい」の思いに引きずられて、いつかはへ信者」になれると自分を買いかぶってしまう。信者になる前の自分のままで助けていただくより仕方のないのが私のまこと。にもかかわらず、聞法していく中で知らず知らずのうちにへいつかはどうかされる」という定散心にたぶらかされるのである。親鸞聖人が「定散心雑わるが故に出離その期なし」(化身土巻)と仰せられる通りである。

弥陀はどうともなれぬ私をすでに勘定済みで「そのままなりで助ける」と仰せ下さるのであった。

無相さんのメモはさらに徹底して「有難くなつての往生の話やめでたい往生の話はたくさんあれど、私はそうはいかん。呼吸困難ー無相さんは病気がちであったーになると有難いもこそばゆいも、念仏さえすつとんでただ苦しいばかり。苦しい凡夫の生地だけに。この凡夫の生地のまんまで死なしてもらおう。如来様が引き受けてくださる。如来様は凡夫の表面を云っているのではない。凡夫の生地何としても助からん、仏法気のツユチリもない、それを如来様は目をつけて助けんと思し召したちける本願である」

と書き付けておられる。病気が苦しいときは、有難い心もうれしい心も平生の念仏もふつとんで、へ苦

しい、苦しい」よりほかはない。いわば凡夫の本性が丸出しになる。これが私の生地である。ウブである。如来様おみぬきの私の姿である。この私の生地のママが如来様のおん目にとまっているのである。そんな私に「助ける」と仰せくださり、寄り添いたもう如来様である。それゆえ吉藏同行の仰せられる如く「私はただ凡夫の性のウブのまま死んで行くのじゃ」で、このウブのママ、凡夫の生地のママ死んで行きさえすればいいのである。私は凡夫の生地のママ死んでいくだけである。何もいらぬ。

こう聞くとまた

「どうしてみようもない私を救うて下さるのが大悲の阿弥陀様である」というへ教義」にしてしまう。こうしたへ教義をつかんで安心しようとする。それがまたはからいである。

ナムアマミダブツは「そんな者を」の仰せぎり。「助ける」の仰せばかり。大悲の仰せが響いているばかりである。

ナムアマミダブツ、ナムアマミダブツ
(了)